平成２６年第２回竹原市議会定例会会議録

平成２６年６月１９日開議

（平成２６年６月１９日）

議席順	氏　　名	出　欠
1	山　元　経　穂	出　席
2	高　重　洋　介	出　席
3	堀　越　賢　二	出　席
4	川　本　　円	出　席
5	井　上　美津子	出　席
6	山　村　道　信	出　席
7	大　川　弘　雄	出　席
8	道　法　知　江	出　席
9	宮　原　忠　行	出　席
１０	片　山　和　昭	出　席
１１	北　元　　豊	出　席
１２	稲　田　雅　士	出　席
１３	松　本　　進	出　席
１４	脇　本　茂　紀	出　席

職務のため議場に出席した者は，下記のとおりである

議会事務局長　　西　口　広　崇

議会事務局次長　　住　田　昭　徳

説明のため議場に出席した者は，下記のとおりである

職　　名	氏　　名	出　欠
市　　長	吉　田　　基	出　席
副　　市　　長	三　好　晶　伸	出　席
教　　育　　長	竹　下　昌　憲	出　席
総　務　部　長	中　川　隆　二	出　席
総　務　課　長	塚　原　一　俊	出　席
情報化推進室長	塚　原　一　俊	出　席
企画政策課長	福　田　吉　晴	出　席
財　政　課　長	沖　本　　太	出　席
税　務　課　長	向　井　聡　司	出　席
会計管理者	前　本　憲　男	出　席
会　計　課　長	前　本　憲　男	出　席
監査委員事務局長	広　近　隆　幸	出　席
選挙管理委員会事務局長	広　近　隆　幸	出　席
市民生活部長	今　榮　敏　彦	出　席
市民健康課長	森　野　隆　典	出　席
まちづくり推進課長	國　川　昭　治	出　席
文化生涯学習室長	堀　信　正　純	出　席
忠　海　支　所　長	森　野　隆　典	出　席
人権推進室長	博　　庄八郎	出　席
福　祉　課　長	平　田　康　宏	出　席
子ども福祉室長	井　上　光　由	出　席
建設産業部長	細　羽　則　生	出　席
産業振興課長	桶　本　哲　也	出　席
商工観光室長	向　井　直　毅	出　席
建　設　課　長	大　田　哲　也	出　席
都市整備課長	有　本　圭　司	出　席
区画整理室長	有　本　圭　司	出　席
上下水道課長	沖　谷　秀　一	出　席
農業委員会事務局長	桶　本　哲　也	出　席
教育委員会教育次長	久　重　雅　昭	出　席
教育委員会教育振興課長	久　重　雅　昭	出　席
教育委員会学校教育課長	九十九　邦　守	出　席
公営企業部長	宮　地　憲　二	出　席

付議事件は下記のとおりである

日程第４　一般質問

午前１０時００分　開議

議長（稲田雅士君）　皆さんおはようございます。

ただいまの出席議員１４名であります。定足数に達しておりますので，これより本日の会議を開きます。

昨日に引き続き一般質問を行います。

質問順位５番，脇本茂紀君の登壇を許します。

１４番（脇本茂紀君）　発言通告に基づきまして一般質問を行ってまいります。脇本茂紀でございます。

まず最初の質問ですが，しまのわ２０１４をどのようにまちづくりに生かしていくか，このことについて質問をいたします。

広島県と愛媛県という瀬戸内ど真ん中を舞台に展開される，しまのわ２０１４を竹原市のまちづくりにどのように生かしていくかは極めて重要な課題です。時あたかも竹原市にとってはホットな話題が集中しているだけに，機を逃さずこれらを活用して町おこしを展開していくべきだと思います。

その一つは，今年の本屋大賞を獲得した和田竜著「村上海賊の娘」が既に１００万部を突破するベストセラーとなっていることです。この小説は石山本願寺をめぐる攻防戦を描いた歴史小説で，村上武吉の娘，景を主人公とするものですが，この小説の中で大活躍するのが忠海の賀儀城の城主，乃美兵部丞宗勝です。作者の和田竜さんは，しまのわ２０１４の広報紙「瀬戸内ゴーランド」に忠海の賀儀城や勝運寺の取材記を書いていますが，この小説の宗勝像はまさに勝運寺に残る肖像画そのものに描かれています。また，この小説には石山合戦出陣のために１，０００艘の船が賀儀城に集結する場面や，小早川隆景，村上武吉とともに宗勝が生き生きと描かれています。さらに，高崎の一向宗門徒や東野長善寺に残る「進者往生極楽，退者無間地獄」という旗も登場します。既に発行元の新潮社には映画化のオファーも来ていると聞いています。

忠海では，この秋に行われるみなとオアシスのイベントでは，是非とも賀儀城や勝運寺や宗勝の事績をめぐるツアーや村上海賊の拠点をめぐるクルージングなどを企画しています。また，この小説には後に竹原鎮海山城の主となり，長生寺に墓のある村上元吉も登場します。安芸門徒の拠点であった竹原市の歴史，文化を発信する好機だと思いますが，いかがでしょうか。

さらにもう一つは，この９月から始まるＮＨＫの朝の連続ドラマ「マッサン」です。こ

れは竹原出身の竹鶴政孝・リタ夫妻を主人公としたドラマで，既に竹鶴酒造でのロケも敢行されました。竹鶴政孝は日本のウイスキーの先駆けをなす人で，川又一英著「ヒゲのウヰスキー誕生す」の中でその生涯が描かれています。また，「ウイスキーと私」や「ヒゲと勲章」という自伝もあります。竹鶴政孝は日本で本物のウイスキーを作ろうとイギリスに留学し，その技術を習得して帰国するのですが，その時リタを知り伴侶とします。そのリタについても早瀬利之著「リタの鐘が鳴る」，森瑤子著「望郷」，チェックランド著「リタとウイスキー」という本が書かれています。

竹鶴政孝は，忠海中学校時代に大乗の福田に下宿して，海や山の幸を使って自炊した体験が自分の味覚を育てた，そして中学校の後輩，池田勇人との交友についても多くを語っています。過日，今回の「マッサン」の舞台となる北海道余市の町長が竹原市を訪れ，私たち竹原市議会総務文教委員会も余市町を訪れました。今回の「マッサン」を通じて，是非とも都市間の連携交流を強め合おうと話し合いましたが，今後の取り組みについて伺います。

関連して，アヲハタの創始者でもある中島董一郎も同じようにイギリスに留学して，マーマレードやマヨネーズを日本にもたらしました。実はアヲハタの社名は，中島がイギリスで見たオックスフォードとケンブリッジ大学のボートの対抗戦の応援旗にヒントを得たものだそうです。

また，最近ＮＨＫの番組でたびたび忠海の石風呂が取り上げられています。前にも紹介しましたが，米国生まれの詩人アーサー・ビナード氏は「平和な瀬戸体内海」という文章の中で，石風呂の稲村喬司氏の仕事を次のように評価しています。忠海の石風呂に入ってみたら，自分の風呂の概念がたちまち溶けて幅が広がり，未知の時空に浸りながら，蒸されるよりも燻されるよりも孕まれる感覚を知ったのだ。でも，その熱のもとが仕込まれるのは午前中，一体どうやって焚くのか，岩乃屋の御主人稲村喬司さんに教えてもらった。燃料は竹原あたりの山で，間伐や枝打ちなどの枝木。稲村さんはそれを譲り受けて，石風呂の洞窟の一番奥で毎朝，枝木の束を幾つも並べて火をつけて豪快に焚く。四方八方に広がる熱が岩に深く浸透して，炎がおさまってくると灰を外にかき出し，おき火を湯沸かしの熱源に使い，客が自由に料理できる囲炉裏にも移す。そして，灼熱の石風呂内にはアマモをふかぶかと敷き詰めて，扉をすっぽりと嵌めておく。後は蒸されるがままに。肝心のアマモはどこで手に入るかというと，干潟の周りの海が与えてくれる恵みだ。夏の間に何日もかけて手作業で採り続けて，丁寧に日に干し１年分を蓄える。

しまのわ２０１４では，アヲハタジャムデッキや石風呂も大いに注目されています。

そして，最後は大久野島です。今年の連休も大久野島は大盛況で，忠海の国道１８５号は大渋滞でした。大久野島の支配人をして，島が沈むと言わせるほどお客さんが増えているそうです。また，最近ＪＲ呉線に乗っても，大久野島行きの外国のお客さんが増えています。特にヨーロッパからのお客さんが多いそうです。そこには，地元の私たちが感じない魅力が大久野島に秘められているということです。瀬戸内海の多島美，ウサギと癒やし，毒ガスと平和教育，新鮮な海の幸山の幸を生かした料理，温泉と海，コスプレ，海ボタル，周辺観光など様々な要素が考えられますが，いずれにしても大久野島がおもてなしにおいて竹原の文化をリードしていることは確かで，この盛況から学ぶことはたくさんあると思います。そして，竹原，忠海が持つ瀬戸内ど真ん中の地の利を生かして，まず何よりも目の前の今治市や大崎上島町との連携を強化することが，しまのわ２０１４で求められていると思います。

そこで質問ですが，今年の広島県と愛媛県のメインイベントである，しまのわ２０１４のこれまでの取り組みを通じてどのような成果が得られているか，またこれからの取り組みを通じた竹原市の獲得課題は何か，改めてお伺いいたします。

２つ目は，スマートシティ，コンパクトシティとしての竹原市の将来像について質問をいたします。

私はかねてより，全ての公共施設が自転車で行ける範囲にあるようなコンパクトシティこそ，誰もが住みやすい町だと主張してきました。しかし，平成の大合併に見られる中心市街地への公共施設の集中は，周辺の町をますます住みにくいものにしています。アメリカの歴史学者で都市文化史を専門とするチェスター・リーブスは，「世界が称賛した日本の町の秘密」という本の中で，実用的な自転車が都市において広く利用されるためには，自転車に優しい建物の配置や狭い道路以上のものが必要となります。最高レベルの自転車町内では，日常生活に必要なものが徒歩もしくはママチャリで簡単に手に入れることができます。こうした町内では，学校，役所の支所，コミュニティセンター，病院，診療所，薬局，郵便局，交番など重要な施設が家のそばに立地しています。また，コンビニエンスストアや看板屋，材木屋，仕立て屋，写真スタジオなどが住宅と混在して立地し，ちょっとペダルを漕いだ程度の距離にあるのです。そして，ほとんどの自転車町内は商店街が存在することで完成します。そこには，薬局，食堂，八百屋，魚屋，米屋，花屋，百円ショップ，パン屋，コンビニ，服屋，床屋，美容室，布団屋，電気屋，金物屋，携帯電話ショ

ップ，自転車屋などが密集しています。

日本の自転車町内において，ママチャリで買い物をするとどうなるでしょう。まず，スーパーマーケットは自宅の近くにあります。ちょっとした人力が必要ですが，移動にガソリンは一切使用しません。ママチャリはスーパーマーケットの前にある小さな空間に駐輪できます。買い物客は，自転車に取り付けられている買い物かごと同じくらいの小さなかごで，ママチャリで運ぶことができる程度の量の食料品を購入します。そして帰宅後，自転車は家の敷地内に駐輪することができます。家に運ばれた食料品は，小さな冷蔵庫に十分収まります。その結果，台所は小さくなり，家もコンパクトになり，街区もコンパクトでヒューマンスケールの街路を有し，コンパクトな建物がつくられます。

日本の自転車町内で見られるもう一つの地球環境に優しい伝統は，狭い道路が地域住民のための前庭の機能も果たしていることです。この道端のランドスケープには，目で見て楽しめるものがたくさん陳列されています。道に沿って置かれる美しい花々は，そこに住む人たちが近隣住民と地球に与えてくれる偉大なプレゼントのようにも感じられます。魚を運搬するために使われた発泡スチロールがリサイクルされ，土が入れられ，ミニチュアの花壇になっています。その横の花壇や大きな陶磁には樹が植えられ，ちょっとした森のような風情を演出しています。それは，江戸時代から続いている裏道を住民が管理するという伝統です。

大変長い引用になりましたが，地域コミュニティや協働のまちづくり，公共交通のあり方等を考える上で極めて重要な提言だと思います。「ポスト・モータリゼーション，２１世紀の都市と交通戦略」が叫ばれ，郊外出店型ショッピングセンターの時代は終わった，今こそ発想の転換で商店街に新たな息吹を，主張する町だけが生き残るとして，まちづくりのスマート革命が叫ばれているときに，竹原市は総合計画，「住みよさ実感　瀬戸内交流文化都市」の実現に向けての後期５年に，どのようなコミュニティデザインを描こうとしているのかお伺いをいたします。

以上，壇上での質問といたします。

議長（稲田雅士君）　順次答弁願います。

市長。

市長（吉田　基君）　脇本議員の質問にお答えさせて頂きます。

まず１点目の御質問についてでありますが，瀬戸内しまのわ２０１４は，瀬戸内海国立公園指定８０周年を迎える２０１４年，穏やかな気候，美しい景観，豊かな自然，おいし

い海の幸や歴史が積み重なるアート，文化及び伝統など，世界に誇ることができる瀬戸内海の魅力を広く発信していくため，広島県及び愛媛県並びに両県の島嶼部及び臨海部の１３市町が参画した広域的な観光プロモーションであり，瀬戸内海に暮らす人々が自ら楽しむとともに，訪れる人々が一緒に楽しむことができるイベントを通じ，人々の和で島々の輪をつなぐことを目指して，２０１４年３月２１日から各地で様々なイベントが開催されております。

本市におきましては，毎年１０月に開催する「町並み竹灯り～たけはら憧憬の路～」とタイアップした「しおあかり～竹原～」の開催が予定されております。このイベントは，本市のシンボルである竹と歴史を振り返った塩をテーマとして，現在整備を進めている竹原港北崎旅客ターミナル内にソルトアートを，屋外に竹あかりオブジェを展示し，来訪者に幻想的な雰囲気を感じて頂く企画となっております。

また，地域住民グループなどが実施する宮床まつりやゆかた祭りなどが民間企画イベントとして実施されるとともに，忠海地区では「しまのわさんマップ」が作成されるなど，地域の情報発信につながっているものと考えております。

さらに，瀬戸内の素材を使った特製メニューを提供する「しまのわカフェ」に市内７店舗が参画しているところであり，地元産の素材を使った新たなメニューを活用し，その土地のおいしい食べ物を通じた竹原の魅力発信に大いに寄与して頂いているところであります。

これらの取り組みに加え，９月末から放送が開始されるＮＨＫ連続テレビ小説「マッサン」が今後実施を予定しております。「いっぺんきん祭みなとオアシスただのうみ」等のイベントなどを契機に，こうした人々のつながりや地域のつながりを促進していくとともに，広域的な連携や本市の観光資源を活用した取り組みを行うことで，より一層の観光客数の増加や交流人口の拡大を図ってまいりたいと考えております。

次に，２点目の御質問についてでありますが，まちづくりを検討し推進していく上で，コンパクトシティやスマートシティといった取り組みがありますが，こうした取り組みは，まちづくりのための手法であり，その目的は市民の皆様の暮らしの質の向上，維持を図ることであると考えております。

こうした考えのもと，本市におきましては，今年度から総合計画の後半の５カ年を迎えるに当たり，後期基本計画を策定し「ふるさと竹原の“強み”を生かした更なる挑戦～人口減少社会に対応した活力ある竹原市をめざして～」をテーマとして，「子どもが夢をも

ち人が集まるまちづくりへの挑戦」をはじめ，６つの挑戦のもとでさらに力強いまちづくりを進めていくことといたしております。

今後におきましては，この後期基本計画に基づき，住民の皆様にとって，それぞれお住まいになっておられる場所が生活の中心であるという認識のもと，引き続き，持続可能な社会の構築に向けて，市民の皆様の暮らしの質の向上，維持を図ってまいりたいと考えております。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　それでは，再質問をしてまいります。

まず，しまのわ２０１４をどのようにまちづくりに生かすかということに関連しまして最初の質問をいたします。

しまのわ２０１４の重要な柱は，瀬戸内ど真ん中に存在する地域の連携をどのようにつくり上げていくかということにあると思います。本日６月１９日は三原中央公民館において，しまのわ２０１４地域交流，忠海，佐木島，三原が開催されます。７月１８日にはグリーンヒル尾道においてみなとオアシス全国協議会総会が開催され，翌１９日には瀬戸田港においてＳｅａ級グルメ全国大会が開かれます。

そして，竹原市内では忠海祇園祭，天神夜市，竹原住吉祭，櫂伝馬競走大会，各地での盆踊り大会が行われます。同時に，しまのわ地域にはたくさんの海の祭りがあります。祇園祭一つをとっても，ルート１８５みちばた会議でつながる忠海，安芸津，川尻には，それぞれ個性を持った祇園祭があります。また，各地に花火大会があります。これらをつなぐことがしまのわ２０１４の任務でもあります。みなとオアシスやルート１８５みちばた会議，竹原港，忠海港と縁の深い今治市，大崎上島町との都市間連携を図っていく上で，このしまのわ２０１４をいかに活用するか，そういうお考えがあれば伺っておきます。

また，竹原港，忠海港の改修とあわせて，本来の港の役割，すなわち観光や交易の拠点間の連携を視野に置いて，このしまのわ２０１４をどのように位置づけ，どのように活用するのか，お伺いをいたします。

議長（稲田雅士君）　商工観光室長。

商工観光室長（向井直毅君）　しまのわ２０１４の活用策についての御質問であります。

本市は，豊かな緑と水と瀬戸内海，歴史と文化の町並み，四季折々の自然と生活文化，地域における様々な活動，陸と海と空の交通条件など，数多くの強みを備えております。こうした本市の強みを生かし，ルート１８５のさざなみ海道，安芸灘諸島を結ぶとびしま

海道，芸予諸島を結ぶしまなみ海道をトライアングル状に結んだ瀬戸内沿岸地域の関係者団体と様々な連携を図る中で，交流人口の拡大や地域の活性化に向けて現在取り組んでいるところでございます。

こうした中，本年３月から広域的な観光プロモーションであります瀬戸内しまのわ２０１４が開催をされておりまして，本市におきましても「たけはら憧憬の路」とタイアップいたしまして「しおあかり～竹原～」や，地元地域の人々によります民間企画イベント宮床まつりやゆかた祭りなど様々な企画イベントが開催をされているところであり，これらのイベントはしまのわ関連イベントとして，個々のイベントを輪としてつなぎ，開催エリアの広域的な周遊を促進すべく様々な媒体を通じて広く情報発信をして頂いているところでございます。

このような取り組みを継続して進めることで，近隣市町と連携をいたしました広域ネットワークを形成し，人々の相互交流を広め，本市の新たな産業振興に向けた契機とし，人が集まる元気なまちづくりにつなげていければというふうに考えておりますので，どうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　今お話がありましたように，ルート１８５でこの沿岸地域の町がつながってきました。また，その大きな柱はかつての豊田竹原地区っていいますか，地域でそこの町々で，いわば地域で一生懸命頑張って活動されておられる方々のネットワークというふうなものをつくることが追求をされてきました。残念ながら広域合併，平成の大合併が行われたために，かつては安浦町，安芸津町，川尻町，それぞれに地元の方が参加され，またそれぞれの町役場の職員の方々が参加されてこの交流が確保されてきました。

ところが今は，三原市，竹原市，東広島市，呉市になってしまって，ある意味では市としても市の重点的な，ど真ん中の課題ではなくて何となく端のほうの課題みたいになる，同時に地域で頑張っておられる方々はむしろ離れていくというふうな傾向があらわれてきています。そういう意味で，実はこのしまのわ２０１４というのは，民間における連帯とか交流というふうなものをつくっていく，そういう作業をいわばプロモーションするっていうのが重要な役割だと思います。そういう意味で，これまで培ってきた例えばルート１８５のみちばた会議，あるいはみなとオアシス，そうした積み重ねというふうなものを今後どのように生かしていくかということが大きな課題だと思います。

もう一つ残念なのは，せっかくこのしまのわ２０１４っていう課題が提起されたんですけれども，これに手を挙げて乗ったのは忠海の宮床まつりと，それからゆかた祭り，そしてみなとオアシス，それからもう一つが竹原のしおあかりの４つでありました。せっかくのこういうプロモーションでありながら，やはり竹原市内の様々な地域において，この２０１４というものを活用して活性化を図ろうという取り組み，そういうことがあってしまのわ２０１４というものがだんだんと意味を深めていくんだろうというふうに思います。

そういう意味で，前期忠海では宮床まつりとゆかた祭りがこのしまのわ２０１４とタイアップして行われました。非常によかったのは，先日のゆかた祭りも非常にたくさんの方々が参加して，なおかつ周辺地域からも参加をする，そして出し物やいろんな店にしてもそういうものがうんと増えたというふうに聞いておりますし，ある意味で忠海の夏を彩るゆかた祭りというものが改めて再定着したというふうに思う訳であります。あわせて宮床まつりでは，既に報道されてますように三次の鵜飼いが毎年忠海にやってくる。それは，三次街道というものを通じて歴史的に三次と忠海が深い関わりを持っていたことを一つの契機にいたしまして，そういうことになったら三次市との交流を深めるとともに，忠海の文化，歴史のアイデンティティーというものを感じるということができたというふうに思います。

そういうことを考えてみますと，これから後期の例えば竹原において言えば，今までの憧憬の路にプラスしてしおあかりというテーマで港をクローズアップしようということなんですけれども，やはりそれらがそうした地域の人々が竹原の歴史や文化，そして今ある様々な取り組みをグレードアップしていく，そういうことにこのしまのわ２０１４というのを役立てることが非常に重要だと思いますが，そこらあたりをどのように考えているか，まずお伺いをしたいと思います。

議長（稲田雅士君）　商工観光室長。

商工観光室長（向井直毅君）　地域の人々とのつながりということの御質問であろうかと思います。

確かに議員おっしゃられますとおり，前期で開催をされました宮床まつりでありますとか，ゆかた祭り，非常に盛況に多くの方々の来訪があったように私も聞いております。今後につきましてもそういったつながり，人と人との輪というものを今後も継続して実施ができるような取り組みにつきまして，今後鋭意検討していきたいというふうに考えておりますので，どうぞよろしくお願いをいたします。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　それで，竹原港の改修が行われて，それのオープニングセレモニーが今度行われると，その延長線上で多分このしおあかりということも考えられているんだろうと思います。

私が常々思いますのは，瀬戸内ど真ん中にこの竹原市が位置していると，という意味からすると竹原市がキーパーソンといいますか，その要の役割としてそういう近隣地域にとどまらず，歴史的にも竹原とつながってきた様々な町々と連携をして，この瀬戸内地域の再活性化，そういうふうなことを図る要の役割を果たさなくてはならないというふうな気がする訳であります。この間のみなとオアシスにしても，竹原市がいろんな意味で中心的な役割を果たしてきたことが大きいし，これはみちばた会議でもみなとオアシスでも同様に言えることですけれども，そういうイニシアチブっていうものがある意味でこれからのいわば外交といいますか，そういうものを形づくっていくんだろうと思います。

さっきちょっと報告をいたしましたけども，ことしのＳｅａ級グルメ全国大会は瀬戸田で行われるんです。なぜ瀬戸田かっていうと，今全国みなとオアシス協議会の会長は瀬戸田なんです。瀬戸田の地域でずっと港まちづくりで活動された方が，みなとオアシス全国協議会ができて以来ずっと会長を務められていて。ということはどういうことかっていうと，実はみなとオアシスっていうのはこの瀬戸内海から始まってるんですよと，さらにその出発点は広島県なんですよと，さらにその出発点は瀬戸田なんですよと。だけど，みなとオアシスっていうときに大きな港ばっかり考えるかもわからないけれども，実はこの間の海の航路がどんどん衰退していく中で，そういう航路を持っていた港がどんどん寂れている。そういう中で，何とか寂れてる港を活性化しようということでみなとオアシスが始まった訳でありまして，そういう意味ではこの中国四国地域にはそういう寂れていく港がたくさん存在していて，しかしそこを改めて活性化するそういうネットワークをつくろうじゃないかというのがこのスタートであったと。そういう意味では，全国協議会の中でも中国四国地域の港がそうした新たな活性化の道をどう切り開いていくかということに注目し，この活動が続けられているんだと思うんです。

そういう意味で，是非竹原がこの中国四国地域の，もっと言えば全国のイニシアチブを発揮するような取り組みをしていく必要があると。そういう意味で，しまのわ２０１４というのは竹原がどれだけの発信力を持つか，どれだけのイニシアチブを獲得するか，そういうことを念頭に置いてこれから後半の様々な取り組みをしていく必要があるんではない

か。とりわけ憧憬の路は，この間のアニメ「たまゆら」なんかとも連動して大きな注目を集めていると，それがまた海の拠点である港，昨日議論がありましたように港というものを，また新たな魅力として，また同時にそこにある様々な歴史や文化というものを打ち出して，憧憬の路をさらにもう一歩角度を広げて，そういうふうにこの秋取り組まれればもっと参加する人も，あるいは具体的に憧憬の路を運営される方々も，もっと広がった人と内容をつくり上げることができるんではないかと，いうふうな意味も込めて，せっかくこの夏祭りがそれぞれ行われる，さっき申し上げましたようにそれぞれで行われる夏祭りこそ，ある意味ではこの瀬戸内地域の文化の結集のようなもんですから，こういうものをつなぐことがさらに秋のしまのわ，しおあかりにもつながっていくというふうに絵図を描くといいますか。だから，商工観光なり，まちづくり推進課なり，そういうところで是非このしまのわ２０１４に物語性とかあるいは連続性とかを是非考えて，後期の取り組みを活発に行って頂きたいというふうに思って質問をいたしました。ある意味では，夏祭りはこの海の地域の非常に大きな取り組みだし，これは全ての町で現にある訳で，そういうものをもっとつなげばそれぞれの祭りが歴史的にもあるいは文化的にももっと広がりを持つことができるんではないかと，そういうことも考慮に入れたワークショップのようなものを是非積極的に開いて頂きたいという意味で質問をいたしました。

そこで，質問の２つ目であります。

「村上海賊の娘」は，そのような歴史的，文化的交易を促す契機として様々な示唆を与えています。この小説の中には，質問でも述べたようにこの地域の様々な人物が登場します。村上武吉とその娘景姫，そして息子元吉，それから小早川隆景と乃美宗勝，毛利輝元，吉川元春と児玉就英，すなわち毛利水軍と村上水軍の英雄たちがこの小説に登場するだけではなくて，ある意味でこの瀬戸内海中央地域に割拠していた，そういう世界が描かれる訳です。さらに，浄土真宗安芸門徒，さらには大三島で鶴姫っていう伝説がありますけれども，実はこの小説の中に出てくる景姫が石山合戦で大活躍する，その景姫がもし戦えば我々は勝てるっていうふうにおやじの武吉が考える一つのもとは，大三島の鶴姫伝説なんです。そういうふうに，いわばこれまであった様々な物語を集大成するような形で，この「村上海賊の娘」がつくられておりまして。

そういう意味では，この小説が映画化されたり，もう既に１００万もの人に読まれているということであるならば，やっぱりこのことを活用をして，この後期のしまのわ２０１４の中にフルに生かしていくっていうふうなことが可能なんではないかと。そういう意味

で１００万部の読者をこの竹原地域に引き入れるためにも，これから行われる２つのイベント，例えばみなとオアシスただのうみであり，竹原の憧憬の路，あるいはしおあかり，こういうものとこの「村上海賊の娘」をつなげば，もっと広域的なイベントや瀬戸内海中心部を舞台とした様々なことが可能になるのではないかと。そういうネットワークといいますか，取り組みの一つの要にこの「村上海賊の娘」というものを生かしていくっていうことが大変重要だと私は考える訳であります。そこらあたりについて，もしお考えがあればお伺いをしておきたいと思います。

議長（稲田雅士君）　建設課長。

建設課長（大田哲也君）　今回のしまのわをきっかけに人を呼び寄せることが大事であるということの御質問ですが，本市を含めました周辺地域に興味を持って頂き，訪れてみたいと思うようなきっかけづくりの一つといたしまして，みなとオアシスただのうみにおきましては，毎年忠海周辺で「いっぺんきん祭みなとオアシスただのうみ」を開催しております。昨年の開催のイベントでは，全国の港との交流を目的といたしまして，全国８０の港に出店と特産品の出店を呼びかけまして，神戸港，広島港からは出店を頂き，その他の１５港からは２８品目にわたる出店を頂いており，北は北海道から南は沖縄まで全国のみなとオアシスの特産品をＰＲするとともに，全国のみなとオアシスとの交流を深めてきたところでございます。

今年度におきましては，瀬戸内しまのわ２０１４の期間中である１０月１９日にイベントを開催することで，現在準備を進めておりまして，内容につきましては現在地域住民で構成されております協議会の中でワークショップを行いながら，しまのわを絡めた具体的な企画を立案しているところでございます。

今後も，みなとオアシスのつながりを生かしまして，竹原港，忠海港，両港の港のにぎわいに取り組むとともに，全国のみなとオアシスとの広域的な連携によりまして一層密にし，地域住民と行政が一緒になって港のにぎわいづくりに取り組んでいきたいと考えておりますので，よろしくお願いをいたします。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　みちばた会議ではマップを作ったんですよね。そのマップの中で，この１８５号沿いの町で行われる祭りを１月から１２月まで列挙をして紹介をしました。同時に１８５号本線ではなくて，昨日も話にあったようないわゆる脇道と言われる道を改めてクローズアップして誰もが歩くような道にすることは，この１８５号沿いの様々

な景観や歴史的なもの，そういうものを地図の中にも掲載をする，あるいは行ってみたい店とか，喫茶店とかカフェとかそういうふうなものも掲載するというようなことをこれまでやってきて，一定のマップもできています。ある意味では，これまでそうやって蓄積されてきたものというものを，こういうしまのわ２０１４というふうなものを機会にして広げていくといいますか，そういう作業が非常に大切だなっていうふうに思うんです。

そういう意味でいえば，さっきなぜ「村上海賊の娘」の話をしたかっていうと，その小説の中に出てくる重要なものっていうのは，竹原市にとってもこの周辺地域にとっても非常に重要な歴史遺産であり，いわばみんなが非常に大切にしてきているものでもある訳です。例えば長善寺にある黄旗っていうのは，余り多くの人は知られないけれども，浄土真宗の特に一向一揆なんかに関心を持ってる人からすれば，その「進者往生極楽，退者無間地獄」っていう旗は超大切な文化財でもある訳でありまして，そういうものが忠海町内あるいは竹原市内にたくさんあって，そういう竹原を「村上海賊の娘」もそうだし「たまゆら」もそうだし「マッサン」もそうですけども，多くの方々が訪れるとしたらこれだけいいものがあるんだよっていうことをやっぱり示していくというか，知らせていくっていうことが大変重要なんではないかと。

そういう意味で，せっかくあるイベントと今までやってきたイベント，そうした新たに加えられた様々な条件と，そういうものを駆使してこのしまのわ２０１４という一つの舞台を有効に活用して，後々の観光や歴史文化の振興に役立てるようなそういうものにしないと，一過性のものに終わってしまうというふうに思うんです。そういう意味で，是非この秋に行われる２つのメインイベントと合わせて，この「村上海賊の娘」などを多くの人に読んでもらって，読んでもらうことによって多くの人が忠海や竹原に愛着を持って頂くと，そういうような役割がこういうことを一つの契機にして果たせたらというふうに思います。

そういう意味では，竹鶴政孝展は後で話しますけれども，和田竜っていう人がこの小説を書いてるんですけども，例えばその和田竜さんをオープニングというか，早い段階で講師として呼んで，この地域の魅力というふうなものをしゃべってもらうっていうことも入れれば，もっと地元の人にインパクトがあるんではないかと。私も早速購入をして読みましたけど３日で読めます，２冊のタイプなんですけども。しかし，読んだらすごくおもしろいから次々人に貸してるんですけども。図書館は二十何人分ぐらい待ちが出てるっていいますし，かめおさんのところに行ったら今平積みにしてありますから。

そういう意味では，是非市の職員の方はもちろん，我々議員，あるいは竹原市内の方がこの小説を読んで，これを何らかの武器に使おうっていうふうに考えることによって，また新たな取り組みにも展開できるんではないかというふうな意味で紹介をいたしましたので，よろしくお願いをしたいと思います。

次に，今度は「マッサン」の話であります。

竹鶴政孝さんは，そういう意味では竹原の先人であり，日本の食文化の先駆けと言ってもいいと思うんです。さっきの中島董一郎さんや廿日出要之進さんというアヲハタの創始者の方々も，日本にジャムの文化といいますか，マーマレードを日本に持ち込んだのも，あるいはキューピーのマヨネーズを日本に持ち込んだのも，やはりイギリスでの留学体験っていうのが非常に大きかった。そういう意味では，竹鶴政孝，あるいはそういう中島董一郎，廿日出要之進というふうな我々の先人がそうした日本の食文化をリードしてきたっていうことについて，意外に我々のほうが十分に知ってないっていうところがあったと思うんです。それを「マッサン」っていう一つのドラマを通じて，我々の郷土の先人である竹鶴政孝という人をまた竹原市民みんなが知るということも大変重要だと思います。

「広島学」っていう本が岩中祥史っていう人によって書かれておりまして，その中で広島にはたくさんの先人がいて，日本の物づくり，今のような食の文化もそうですけども，物づくりにおいて非常に重要な役割を果たしてきた。その中の重要人物の２人に，この今の竹鶴政孝さんや中島董一郎さんが登場するんですけれども，そういう中でこの竹鶴政孝の実績っていうふうなことから我々が何を学ぶかということは，竹原市民にとって大変重要だと思います。

その意味で，近々竹鶴政孝展が道の駅を中心にまた開かれると，さらには竹鶴政孝について語る会というのも開催をされるということでありますけれども，もう一つはこの「マッサン」の放映というのを契機にして，例えば竹原はそういう酒の文化っていうものがもともとあって，その酒の文化が竹鶴政孝をある意味では生み出したということも言える訳です。すると，竹原３社の酒っていうものを改めて全面に出して，それこそ日本のウイスキーの祖は竹原の酒から生まれたと言っても過言ではないというふうなことを言っていく必要があると思いますし，もう一つはこの竹鶴政孝さんが自伝の中で書いているのは，忠海中学校に通っていた時代に大乗の福田に下宿をして，そこで海の幸や山の幸を使って毎日の弁当，あるいは朝晩の食事を自分でつくったと。それが自分の味覚というものを鍛えて，やがてウイスキーのブレンダーになる自分の基礎体力のようなものは，実は大乗の福

田でつくったんだというふうに書いてある文章があるんです。そういう意味では，そういうふうなことの中で我々が改めてふるさとといいますか，地元を見直すという意味で，これら先人の果たしてきた役割を見直すと，そういう大変重要な意味があると思います。

そこで関連して思いますのは，今たけはら食育未来会議っていうのをつくって，いわば竹原市の食についての未来を考えようという会議が行われています。非常にいいことだと思うんですけれども，せっかくそういう食育未来会議というふうなものがあるときに，こうした竹原の食の先人から学ぶとかというふうなものをその会議の活動の中に位置づけて，そして発信していくチャンスではないかなと。

そういう意味で，「マッサン」一つをとっても，テレビで朝ドラで毎日やられるからチャンスという訳ではなくて，それによって竹原の食文化というものが改めて見直され，またみんながそういう酒のふるさと，食のふるさと竹原っていうふうに考えられるような営みをこの夏から秋にかけての様々な取り組みの中で全面に押し出していく。その意味では竹原の酒３社であるとか，あるいはアヲハタという，そういう食に実際関わっておられる方々，とりわけレストランや食堂やあるいは食べ物を扱っておられる方々，そういう方々も含めて是非竹原の食文化というものを考えてみようという機会になれば，もっと全体的によくなっていくんではないかと思います。

そういう意味で，例えば食育未来会議のようなものも，もっと膨らみや広がりを持つことができるのではないかというふうな気がする訳で，今の我々の活動がどうしても自分のエリアからなかなか外に出られなくて，他流試合もなかなかしなくなってっていうようなところがある訳ですけれども，是非こういういわばエンターテインメントな課題を通じて，異業種間の交流でありますとか，あるいは異業種団体の交流でありますとか，そういうものを組織していくことに役に立てば，このしまのわ２０１４というのも非常に重要な意味を持つのではないかと思いますが，そこらあたりでもし御見解があればお答えを願いたいと思います。

議長（稲田雅士君）　答弁願います。

企画政策課長。

企画政策課長（福田吉晴君）　お答えいたします。

今議員のお話にもございましたけれども，また先日の市長の答弁にもございましたけども，本市の強みでございます歴史文化につきましては，これは先人が培われてきた蓄積の賜物でございまして，今回の朝の連続テレビ小説の「マッサン」の放映なども，これはこ

ういった賜物の一つであると認識をしております。こうしたことを契機として，様々な自治体との連携っていうのを大いに期待されているところでございまして，こういったことに通じてこの連携による相乗効果が大いに期待できるところでございまして，いろんな方法が考えられるところでございますけれども，今後も関係する方々の連携を図りながらしっかりこの機会を活用していきたいと考えております。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　この１の最後にしたいと思うんですけども，それともう一つは都市間交流ですよね。せっかくしまのわ２０１４と言いながら，愛媛県の市町とは前から分断されてイベントが行われているような感じになってますね。ｓｔｕｄｉｏ－Ｌの関わり方も愛媛は愛媛の担当者が関わってて，広島は広島の担当者が関わってるっていうことで，この連続性が本当は，愛媛と広島がつながるっていうことが非常に重要なんですけれども，それはたまたま自転車の三角形であったりっていう形でつながるっていう格好になってますけども，そうではなくって，市としても行政としてももっとお互いの交易というのを広める意味でのつながりというのを是非考えて頂きたいと思います。というのは前々から言ってることですけども，今治市が目の前にあって，もっと言えば目の前どころか今治市と一番近いのは竹原市ですから，だからその一番近い今治市ともっと何らかの，かつて事務レベルでは今治市と竹原市の交流といいますか，定例会というふうなものをやろうという話があったんですけどもどうも何となく尻すぼみみたいなところがあって。

そういう意味では是非これもしまのわ２０１４を機会に，今治市と竹原市の友好関係といいますか，そういうふうなものを築く努力が今特に必要なのではないか。なぜかというと，いつも言うことですけれども，今，今治の市長さんは大三島出身の菅さんですよね。菅さんは吉田さんが議員のときにも竹波フェリーを通じて親交のある方ですし，今，今治市議会の議長さんは波方出身の方なんですよね。そういう意味では議会においても，例えば今治市議会と改めてつながる条件といいますか，契機はあると。さらに加えて，すぐ目の前は大三島でありますから，大三島にはいろんなつながりがある訳でして，それは宮浦においても盛においてもそうですけれども，そういうつながりを改めてこういうことを一つの機会にして再開するというか，そういうことがまず事務レベルでも首長間でもあったらいいんじゃないかというふうな気がいたします。最初からもう姉妹縁組行けとかという話じゃなくて，まずはお互いが腹を割って話し合えるような関係を，今治市と竹原市の間でつくるような営みをして頂ければ，ある意味ではこのしまのわ２０１４が後世に残る役

に立つのではないかと思いますが，そこらでもし御見解があればお答えください。

議長（稲田雅士君）　企画政策課長。

企画政策課長（福田吉晴君）　都市間の交流についてのお尋ねでございます。

都市間の交流につきましては，それぞれいろいろ施策，事業行う観光等の中で様々な自治体との連携を当然図っていかなければならないという中で，ケースに応じたつながりはあろうかと思います。今回御質問でもございました余市，「マッサン」については余市でございますし，今のしまのわについては今治ということでございますんで，そういったケースごとに当然のことでございますけれども，連携を図っていって相乗効果を図っていかなければいけないと認識をしております。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　私は余市のことを改めて言えばよかったんですけども，絶好のチャンスだと思うんです，機会として。竹波フェリーがなくなってからもう数年が経過して，どっちかというと交流は手薄になってきているってなことを考えれば，こういうものを一つの機会にして今治市さん，事務レベル協議を再開しましょうとか，あるいは観光やこういう面で話し合いの場を定期的に持つようにしましょうとか，あるいは交通体系の面で課題があればそれから入ってもいいじゃないですかというような形で，竹原市のほうから一定に働きかけることが大事なんではないかなと。あわせて，余市さん，向こうから最初表敬訪問を町長さんがされてるということもある訳ですし，今度は竹原市のほうから行かれるという話も聞いておりますから，是非余市町と竹原市は竹鶴さんの縁もありますけれども，非常によく似た地域であります。そういう意味では，非常に遠方，北海道と広島県ということで，そういう姉妹縁組のようなものを結ぶこともある意味では非常に意味があるんではないか。余市町は町でありますけれども，リタさんのふるさとのイギリスのイーストダンバートンシャイアとかという町と姉妹縁組をされてるそうであります。そんなことも参考になるので，余市町との交流を通じて，またすぐ姉妹縁組という話よりもそうした信頼関係とか人間関係というのをつくっていくことは非常に大事なことであると思いますので，是非そのような取り組みをお願いして，１番目の質問は終わります。

次に，２点目のスマートシティ，コンパクトシティとしての竹原市の将来像について再質問をいたします。

実は私もしまのわ２０１４に参加をいたしまして，十分参加したほうじゃなくて時々参加してるっていうような感じなんですけども，このしまのわ２０１４のコーディネーター

っていうのは，「コミュニティデザインの時代」という著書を持っておられる山崎亮さんが率いるｓｔｕｄｉｏ－Ｌのメンバーがワークショップやファシリテーションという手法でまちづくりを行ってると。それは人が変わる，そして地域が変わることだっていうふうに述べておられます。その具体例として，例えば隠岐島の海士町でありますとか兵庫県の家島ですか，そういうところでの実践例を挙げて，まずそこに住んでる人が変わらなければ地域は変わらないということなんだということを言われております。

その「コミュニティデザインの時代」っていう山崎亮さんの本を読んでおりまして，その中で行政職員について語っている部分があるんです。――これはうちの事務所のというのは山崎亮の事務所，ｓｔｕｄｉｏ－Ｌでしょうけども――うちの事務所の仕事は８割が行政とのものだ。中でもうまくいったと思える仕事には，例外なく優秀な行政職員が関わっている。優秀なというのは，コミュニティデザインに関する仕事をする際に力を発揮できた職員というほどの意味である。熱い行政職員と言ってもいい。僕たちが最初に経験したまちづくりのプロジェクトである「家島プロジェクト」では，旧家島町役場に熱い人がいてくれた。この人の熱意が町長を動かしていたし，僕たちが進めるプロジェクトをサポートしてくれた。「島の幸福論」をつくったときの島根県海士町にも，「子ども振興計画」をつくったときの岡山県笠岡市にも，「泉佐野丘陵緑地のパークレンジャー」を組織化したときの大阪府にも，「有馬富士公園のパークマネジメント」を検討したときの兵庫県にもそういう職員がいた。こうした職員たちは，動きにくい行政内部でよく動き，通しにくい起案をよく通し，調整しにくい案件をよく説明した。僕たちが関わったプロジェクトが一定の成果を収めているとするならば，実際に活動したコミュニティの力はもちろんのこと，そのプロジェクトを行政側からサポートした職員の力が大きいと言えるだろう。僕たちにできることは，その両者を手伝うことぐらいである。こういう文章を「コミュニティデザインの時代」という本の中で書いてるんです。

私はもちろん，私たちも読むんですけども，行政の職員が読んだらいい本だなっていうふうに思いました。そのことを紹介する意味で今の文章を引用させてもらったんですけれども，実はこれから竹原市の後期計画を具体的に練っていく際に，職員が今言うように，人をつくる，人をつくることによって地域が変わる，人が変われば地域が変わるということですけども，まず最初に行政の職員が変わらなければといいますか，なかなか地域を変えるようなインパクト，そういうものを与えることはできないと。

そういう意味で，私はこの間の協働のまちづくりを見ても，確かに協働のまちづくりの

担当者は連日のように協働のまちづくりのそれぞれのところに行ってるけども，ほかの部署の人がなかなかそこに行くことがある意味少ないと思うんです。課題は，いわば市役所全般に関する様々な課題を議論してるんだけども，担当は協働のまちづくりの担当ということになってる。そこでは，組織づくりとかあるいはそういうことについてはいろいろとできるけれども，例えば住民が本当にやろうとしている地域づくりとかまちづくりというふうな課題になってくると，内容は変わってくると思うんです。それは，今までの具体例で言えば出前講座とか，そういう様々な手法はあるけれども，私が一番申し上げたいのは市の職員が地域に出ていけるような，であると同時に出ていくようないわば作風をどうやってつくっていくかというのがこれから大事な課題なんではないかと。だから，後期計画は机上でつくるんではなくて現場をしっかり見てつくっていくっていうことが大変重要です。思うのはなぜかっていうと，今の市の仕事のあり方が本庁のコンピューターの前で行われてると思うんです。実際の現場になかなか行けないと。行けないもんだから現場のことが十分に把握できずに，逆にコンピューターの中にあるデータがその主流になってしまうというふうな仕事ぶりになっているんではないか。そういう意味でもっと現場重視といいますか，現場へ足を運ぶということを市自体の作風にしていくような，その取り組みがこの後期５カ年のことを決める活動につながっていくような営みが求められていると思います。

これは，行政の仕組みの問題については，本当は私は前々からこう言ってるんですけども，支所，出張所に今のように２人とか，３人しか配置するんではなくて，本当はある部から１人ずつでも支所，出張所にいて，常に現場の声を聞いたり，現場で一緒に考えたりするっていうふうな本当は仕組みをつくるのが一番いいと思うんですけれども，残念ながら今の陣容でそうなるかどうかはわかりません。だけど，そういう現場力というふうなものをどのようにして鍛えるかということについては考えていく必要があると。現場力を培うためには，現場で話す力をつけなきゃならない。現場で話す力をつけるのは何かっていうと，今のところなかなか難しいんですけども，ワークショップとかそういうふうな作業によって，上から下に言うんじゃなしに，一緒に考えて物をつくり出すっていうふうな仕事が実際の職員の仕事になっていかないと，せっかくできた計画も机上のものになってしまうんじゃないか。

だから，後期５カ年は現場からつくり上げる，これから多分１年か２年かそういうワークショップをやるんだろうと思うんですけども，その時にワークショップを通じて市の職

員を鍛え上げるといいますか，もっと言えば住民対応能力，住民と話ができる能力を身につける，そういうふうな作業が問われていると思うんです。そういう意味で私は，こういう総合計画とか後期５カ年計画をつくるということは，竹原市のこれからの５年間をある意味で決めることである訳ですから，それは頭の中にあったんじゃだめで，今の竹原市の現場にそれぞれの職員が実際に出かけていって，そこからつかみ取ってきたものを共有する場として，言うたら町内の会議があり，そしてそういうことを吸収できる場としてワークショップや出前講座があり，そういう仕組みといいますか，システムというふうなものを是非この後期５カ年の計画の中でつくっていければいいんじゃないかと思いますけども，その辺の御所見をお伺いします。

議長（稲田雅士君）　企画政策課長。

企画政策課長（福田吉晴君）　総合計画後期基本計画の策定に当たっての職員の関わりと今後の取り組みについての御質問であろうかと存じます。

本市の総合計画後期基本計画の策定に当たりましては，これまで取り組みの検証と本市の現状を踏まえて，今後の５年間の取り組みの検討を行ってきたところでございますが，これまでの取り組みの検証においては，それぞれ施策を担当する部署や職員が市民の皆様との関わりを通じて各施策，事業についての現状，課題を把握して，それに基づく方針，施策を整理してきたところでございます。

今後において，後期基本計画のこれからの施策の実施，実現というのが重要になってくるとこでございますが，総合計画，後期基本計画においては，前期に引き続いて大きな６つの政策の柱，施策の基軸の中にみんなで築くまちづくりの挑戦というのを一つに掲げておりまして，当然のことではございますけども，各施策を担当する部署及び職員が引き続き，これまで以上に市民の皆様との連携，協働を図りながらまちづくりを進めていくことが肝要であると考えております。

議長（稲田雅士君）　１４番。

１４番（脇本茂紀君）　忠海の協働のまちづくりに関与したりしていろいろ思うんですけども，協働のまちづくりも実際に市民が主人公になって協働のまちづくりが進んでいくと，大きな力を発揮するもんだなと思うんです。というのは，私のところは忠海第２地区協働のまちづくりですけれども，この間話を聞いたら，協働のまちづくりの全体会議にもし代議員さんが出てきたら１００人ぐらいいるんです。それを一回一回の会議で出欠をとったりして会議が進んでるんです。そこで防災のことが話されるんです。防災のことが話

されたときに，その１００人の代議員さんの中には例えば建設業に携わっておられる方もおるし，県のＯＢだった方もおられるし，様々な方々がおられて，それなりにみんな専門家なんです。そういう力というものが協働のまちづくりというものの中からつくり上げられていってる。

私のところの町内は，この日曜日に避難訓練を自治会でやったんですけども，その避難訓練の計画を立てて頂いたのは，それこそ建設会社に元勤めておられた方が，いろいろ自分たちの経験をもとにしてシュミレーションをつくって，あるいは町内の今どこが海抜何メートルっていうのを掲載しています。これだけじゃだめだから，地図の上にここは海抜何メートルというのを全部落としていこうっていうふうな作業をみんなでやってるんです，ワークショップというかそういうことの中で。私は今市民といいますか，地域の方々の中には，特に我々団塊の世代がリタイアをしてますけども，様々な経験を持たれた方々が地域に散らばっておられる。そういう能力を吸収する意味でも，この協働のまちづくりは非常に重要な意味を持ってるんではないか。

そういうことが実はこれからやられる後期５カ年計画の中に，そうした住民の持ってる力とかエネルギーというふうなものが吸収できればもっといい企画が出てくるんではないか。というのはなぜかというと，対市役所っていうことで何となく市役所には要望を言いに行ったり，クレームをつけに行ったりっていうふうなことになるのではなくて，地域の住民が主人公になるような町をつくるというふうに，みんなが考えられるような営みっていうのが非常に大事だと思うんです。それは今の協働のまちづくりでスタートし始めてることなんではないか。だから，そこを本当に民主的に運営することができれば非常に大きな力を獲得することができるっていうふうに思います。

最初の大枠の質問の中でコンパクトシティ，スマートシティっていうふうに言ったのは，いわば自分が住んでいるところで自分たちの生活が完結できることがみんなが望んでることですよね。言うたら，大きな自動車買うてから物すごいガソリン使うていかにゃあ，本庁にもなかなか行けないというふうなことになったんではやっぱりだめなんで，もっと自転車で行けるぐらいの範囲に全てのサービスが整っているというふうなことが本当は理想だと思うんです。ただ，この平成の大合併はそうした周辺地域というもののどんどん過疎化が進んでしまっている，だけどそうなってもみんなは生きなきゃならないし生活をしなきゃならない。すると，みんなが生きやすい生活がしやすいためには何をしたらいいか，何ができるかというようなことを行政と地域が一緒に考えるような場が必要なんで

はないか。それがある意味で協働のまちづくりということの営みなんではないかと。

今はまだ出発点だから，なかなか協働のまちづくりの民主主義とかそういうものを熟成させていくにはまだ時間がかかるかもわからないけれども，少なくとも協働のまちづくりに関わってる方々がそういう展望を，自分たちのコミュニティを自分たちでつくっていくんだっていうふうな展望をお互いが持てるような意識がその組織の中に生まれてくれば，私はもっとすばらしいまちづくりができることにつながってくるんではないか，そこに行政の職員がかむことが非常に重要だと思うんです。何かの課題があったらその担当課が行くということよりも，できたら行政の一定の方々が，現場を本当に持ってる方々がそこに行ってそこでも協同討議をすると，そういう中から改善策や解決策というものを見出していく。というのは，竹原市にそんなに予算がないというのはみんな思うとるけども，ないならないなりに改善して何かをやろうやというてお互いが考えられるようなことになかなかならんのんです。それがそういうふうになるようにするためには，地域がそういうことが議論をできるような仕組みをつくっていこうじゃないかと。だから，私は忠海第２地区協働のまちづくりを見て非常に思ったのは，１００人の人を代議員で組織するなんて普通なかなかできないよねって思うんです。だけど，みんな主体的に自分がやるというてなってくれとる訳ですから。そういう住民が持ってるエネルギーとか力とかというものをいかに有効に活用するかっていうことが重要だと思います。

そういう意味で，この後期５カ年計画には６つの全ての分野のことが入っている訳ですから，それぞれの分野の議論をしっかり深めるとともに，それぞれの分野での協働を地域の方々と進めていくような作風で，この後期５カ年の，もう５カ年ですから短期で基本計画はつくらなきゃならんと思いますけれども，そういうことの営みを是非お願いをしたいと思います。

さっきの御答弁を受けてそういうふうに考えますけれども，終わりに幾つかいつものようにこういう本をもっと読んだらいいですよっていう話をします。

さっき「世界が称賛した日本の町の秘密」っていう本を紹介しました。新書で出てる，それも外国の方から見て，あれは日本の東京の下町あたりの現状をもとに，日本の下町はすごいよね，ママチャリで全部生活が完結するよねと，こんな文化はほかの国にもなかなかないよと，裏の路地に花が飾ってあったりっていうようなこともすごいねっていうふうなことが，外国人の目から見て書かれているんですけども。それは，彼は建築家なんですけど，建築家が見てそういうふうに見るっていう日本の特徴といいますか。私の家はそう

いう路地にあるもんですから，私のところの路地は花がいっぱいです。そういうものの良さみたいなものを地域の人々が実感するっていうことで。本来なら路地っていうのは子供が昼間からどんどん遊んで，いつも子どもの声が聞こえて，おじいちゃんおばあちゃんがその子どもに対して注意したり，例えば何かおやつをくれたりみたいな，かつてあったそういうふうな風景がなかなか現出しなくなった。それは確かに少子化が進みということなんですけども，しかしそういうふうになってる背景には今の忠海の町の機能といいますか，そういうふうなものがどっかでゆがんでるといいますか，不十分なんだろうと思うんです。そういうこともしっかり議論をするという意味では，さっきの「世界が称賛した日本の町の秘密」のよさみたいなところを我々がもっと学ぶ必要があるんではないかと思います。

それから，題にわざわざスマートシティっていうふうにつけたのは，最近スマートシティとかコンパクトシティっていうことがしきりに言われるようになりました。ただ一般的に言われているのは，結局高齢化が進んで郊外にあった団地や郊外の町がどんどん高齢化して寂れてきていると，これをこのまま放っといたら大変だから，もう一遍町の中心部に高層住宅を建てて，集めることによってその周りをコンパクトにしてコンパクトシティにするんだっていうふうな発想が一方にあるんです。本当の意味でのコンパクトシティは，地域のコミュニティで生活をできる，暮らしができるっていうことのコンパクトで，答弁にも書いてありますように，自分が住んでいるところが全てだっていうふうなコンパクトシティを本当につくっていかなきゃならないということだろうと思うんです。やっぱり改めていろんな見直しがされてきて，大型スーパーが郊外にできて町中にあった商店街がどんどん潰れていくっていうようなことで本当にいいのかと，本当はもっとそれぞれのコミュニティの中に商店街があり，そこでみんなが営みができるっていうことが望ましいんじゃないかというふうな声はいろいろありますし，またそういうことが様々な最近の自治に関する本の中に書かれております。

最初の質問で紹介した細野助博著「まちづくりのスマート革命」っていう本があるんですけども，この帯には，郊外出店型ショッピングセンターの時代は終わった，今こそ発想の転換で商店街に新たな息吹を，まちづくりのエキスパートが最新の処方箋を提示。本音で語り，本気で取り組む全ての人たちに贈る，地域再生のエッセンスっていう帯がついてるんですけども，例えばこういう本です。あるいは北村隆一という人が編著で「ポスト・モータリゼーション」という本の帯には，都市を自動車はどう変えたのか，どう変えるの

か，共存するすべは，魅力ある「まち」の再生に向けて，都市構造・流通・商業・観光・地球環境・高齢社会・情報など多角的側面から検証するっていう帯がついてるんです。なぜ帯まで紹介するかっていうと，実は本屋に行ったらこんな本がいっぱい並んでいて，そういうものを我々はこれからのまちづくりや地域づくり，あるいは政策提言や政策の検討の中でこれも武器にしていかなくてはならないというふうな気がして，こういう一般質問のたびごとに本の紹介をしてる訳ですけれども，いずれにしても知は力である訳ですから，地方政治に携わる者はそうしたありとあらゆる情報というものを身につけて，そしてそれを広げていくという任務があると思います。

今，一つはしまのわ２０１４という一つのイベントを通じてそういうものをどうつくるかということとあわせ，これから後期５カ年の計画，さらにこれからの竹原市の将来計画を考える上で，どのような手法や作風というものを竹原市の市民の中に，あるいは行政の中につくっていくかということが大変重要だと思って今回の提言を行いました。

以上をもちまして私の一般質問を終わりたいと思います。ありがとうございました。

議長（稲田雅士君）　以上をもって脇本茂紀君の一般質問を終結いたします。

議事の都合により，午後１時まで休憩をいたします。

午前１１時１７分　休憩

午後　０時５７分　再開

議長（稲田雅士君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

午前中に引き続き一般質問を行います。

質問順位６番，宮原忠行君の登壇を許します。

９番（宮原忠行君）　明政会の宮原忠行でございます。

平成２６年第２回定例会議における一般質問をさせて頂きます。

去る５月８日，民間の有識者らでつくる日本創成会議人口減少問題検討分科会は，２０４０年には，全国の約半数に当たる８９６市町村で，子どもを産む中心世代である２０歳から３９歳までの女性人口が半分以下に減り，人口維持ができない消滅可能性自治体にならざるを得ないであろうとの推計を発表し，あわせてそれぞれの自治体において早急に対策を講ずべきであるとの警鐘を打ち鳴らしました。マスメディアもこの発表に敏感に反応し，大々的な報道が展開され日本列島に衝撃が走りました。

このリポートによると，２０４０年における竹原市の２０歳から３９歳までの女性人口の予想減少率は６４．４％となっており，消滅可能性自治体８９６市町村に含まれていま

す。

私は，これまでも広島県内の出生率ランク表や国立社会保障・人口問題研究所の人口推計等に基づいた竹原市の超少子・高齢化の進行の深刻な実態を指摘し，政治，行政課題の中心に据えるべきことを求め，１４回までの妊産婦無料健診，通院費の助成等々の一定の施策を実施して頂きましたが，それでも人口減少に歯どめがかかっていません。これまでの一般質問で展開してきた超少子・高齢化による人口減少問題に関する論戦を踏まえて，日本創成会議人口減少問題検討分科会報告をどのように受けとめられ，今後の施策に生かせていくための問題意識なり政策課題を共有されているのか，その御所見をお伺いいたします。

次に，３月定例会議において，竹原市における一体型小中一貫校推進に係る教育委員会の不退転の決意と覚悟のほどを確認させて頂きました。

その覚悟と決意をもって臨んだ忠海中学校区における建設事業については，様々な懸念，揣摩臆測が飛び交っていましたが，入札事務も円滑に執行され，今議会において請負工事契約に係る議案も提出され，実現に向けて大きな一歩を踏み出すことになりました。

一方，吉名中学校区における一体型小中一貫校推進については，３月定例会後，小・中のＰＴＡ関係者の御理解と御協力により一定の話し合いの場が持たれたと聞き及んでいますが，なお足踏み状態にあるものと考えざるを得ません。

そこで，これまでの説明会あるいは懇談会等において提起された論点と，事業推進のために教育行政並びに市長部局において必ず解決しなければならない政策課題をどのように把握されているのか，教育長の見解をお示し願います。

次に，足踏み状態にある吉名中学校区における一体型小中一貫教育の進むべき方向，あるいは望まれる一貫教育の姿について，論議の素材の提供，あるいは政策提言をさせて頂きますので，教育長の真摯なる御答弁をお願いをいたします。

現在，全国各地で地域再生，復興を目指した小・中，あるいは中・高，さらには幼・保小中高一貫教育の実現に向けた様々な試みが展開されています。例えば，福島第一原発事故によって教育と地域崩壊の危機にある福島県双葉郡８町村の教育委員会は，地域復興のための地域づくりに貢献できる強さを持った人材の育成を目指すためには，中高一貫校の実現以外に道はないという固い決意と信念のもとに，教育の主体者としての子どもによる教育の創造を目指して，子ども未来会議を発足させ，日本で最初の壮大な実験に取り組んでいるところであります。

こうした双葉郡８市町村教育委員会の取り組みについて，世界の教育大臣と呼ばれている経済協力開発機構教育局次長のドイツ人，アンドレア・シュライヒャーは，「知識を詰め込むだけの学校は幾らでもある。だが，必要なのは子どもたちに問題解決力をつけさせる学校だ。極めて条件が悪い双葉郡から理想の学校が生まれれば，世界中の学校に応用できる」と大きな期待を寄せています。

シュライヒャーが期待を寄せる双葉郡８教育委員会が追い求める理想の教育の原点は，少子化による生徒数の激減により廃校寸前の状態にあった島根県立隠岐島前高校を再生復活させた隠岐島前高校魅力化プロジェクトと隠岐國学習センター，夢ゼミの取り組みがあります。

隠岐國夢ゼミの中から，祖父が経営している畜産業を継ぐために経営や流通を学ぶことを痛感し，慶應大学環境情報学部に進学した川本息生君は，視察のために海士町を訪れた双葉郡８町村の教育長に対して，「安定した畜産業が島で築ければ，漁業や林業にも応用でき，島の活性化につながります」と力強く答え，感動を与えました。

双葉郡８町村教育長たちは，この川本君の畜産業による島の活性化を追い求める姿に，崩壊の危機にある双葉郡の復興，再生のための理想の教育は，双葉郡における川本君を育てることであると確信し，地域づくりに貢献できる強さを持つ人材の育成を教育目標に掲げ，来春の開校を目指して奮励努力されています。

かつて，吉名町においては，タバコ栽培からジャガイモ栽培へと農業改革を断行し，農業経営基盤の安定化を進めるとともに，レンガ産業と海運業等，町独自の産業基盤を創出し，地域循環型経済の運営による地域の絆が育まれていました。高度経済成長に伴う都市化とグローバリゼーションの深化に伴って，地域経済の構造変化に適応した新たな経済革新を生み出せず，超少子・高齢化の進行と社会的流出による人口急減により，中長期的視点から見れば，まさに教育崩壊，地域崩壊の危機的状況にあります。

この危機的状況に立ち向かえるのは，吉名町民以外にはあり得ません。また，困難に打ち勝ち，吉名町再生の理想を実現するための強い人材を育てる教育は，一体型小中一貫校の実現以外にはあり得ません。この点について，教育長はどのようにお考えになられるか御答弁願います。

また，吉名町におけるこれまでの小中一貫校のあり方に関する議論には，教育の対象，主体者としての児童・生徒の参加が欠落していたのではないかと思われます。例えば，双葉郡８町村教育委員会の例に倣って，吉名っ子未来会議を早急に立ち上げ，夢を描き，そ

の夢を実現させるための強い意欲と実践を導き出すための吉名っ子の，吉名っ子による，吉名っ子のための自立，連帯，共生の教育実践が今こそ求められているのではないでしょうか。この点について，教育長答弁を求めます。

さらに，いじめの克服等を目指した教育再生実行会議の議論等を踏まえて，現在，文部科学省においては小中一貫校教育の義務化，制度化を目指すこととされています。こうした今日における小中一貫校教育をめぐる状況等を見ても，吉名町における一体型小中一貫校教育体制の整備促進はスピード感を持って推進されなければならないと思われますが，この点についても教育長の御所見をお伺いします。

最後に，平成２５年度国民健康保険税現年度課税分の徴収率の実績と財政調整交付金の交付見通し並びに今年度における財政調整交付金交付基準である現年度課税分９３％確保に向けてどのように取り組んでいかれるのか。また，財政調整交付金交付基準である９３％確保が法的に求められることについて，国民健康保険の保険者たる竹原市の長として，市長はどのように認識されているのか御答弁頂きたいと思います。

以上をもって壇上での一般質問を終わらせて頂きます。

議長（稲田雅士君）　順次答弁願います。

市長。

市長（吉田　基君）　宮原議員の質問にお答えさせて頂きます。

２点目の御質問につきましては，教育長がお答えいたします。

まず，１点目の御質問についてでありますが，有識者で構成されております民間研究機関である日本創成会議が本年５月８日に行った発表によりますと，本市におきましては，出産をされる中心世代となる２０歳から３９歳の女性の人口が，人口移動が収束しない場合において，平成２２年の２，５３０人と比較して，３０年後の平成５２年には９００人となり，人数にして１，６３０人，率にして６４．４％減少するという推計となっております。

今回の推計につきましては，出産をされる中心世代となる女性の人口に着目し，「消滅可能性都市」という新たなキーワードを用いて，今日の人口減少，少子・高齢化に対して改めて警鐘を鳴らし，現実を理解した上での早急な対策を促しているものと認識いたしております。

人口減少，少子・高齢化対策につきましては，まずは国において抜本的な施策を講じることが必要でありますが，本市におきましてもこの問題を将来の懸念としてではなく，既

に存在している問題として捉え，現在子育て支援，安全・安心づくり，地域振興など様々な施策に取り組んでいるところであります。

今後におきましても，人口減少社会に対応した活力ある竹原市を目指し，雇用の確保，子育て支援などによる人口減少の緩和や持続可能な社会の構築に向けて，市民の皆様の生活の維持，向上に取り組んでまいりたいと考えております。

次に，３点目であります。

国民健康保険税は，国民健康保険制度の運営において欠かすことができない財源であり，また収納率向上に向けた取り組みは重要なことと認識いたしております。

平成２５年度国民健康保険税の現年度賦課分における収納率は，現在９３．１％の決算を見込んでおり，県支出金である特別調整交付金の交付基準に当たる収納率９３％に達しているため，交付金は交付されるものと考えております。

この特別調整交付金は，広島県の交付要綱に基づき，県が市町に対して収納率向上の取り組みを喚起するための達成基準，いわゆるインセンティブとして設けられている制度であり，その達成基準を一定の目標とする市町の考え方が定着しているところであります。

また，国民健康保険税の確保の取り組みにつきましては，滞納者に対し厳正な対応と公平性の観点から，滞納処分を強化するなど積極的に取り組んでいるところでございます。具体的には，新たな滞納を増やさないという方針に沿って，文書催告，電話催告，訪問催告，納税相談などの取り組みを行いながら，滞納額の縮減に努めているところであります。

今後もこれまでの取り組みを継続しながら，より効果的，効率的な徴収事務を進め，必要な財源確保に努めてまいりたいと考えております。

議長（稲田雅士君）　教育長。

教育長（竹下昌憲君）　宮原議員の質問にお答えします。

２点目の御質問についてでありますが，吉名中学校区におきましては，小中一貫校の推進に関して，これまで設立検討委員会や説明会で保護者，自治会と協議を重ね，様々な御意見を頂いてまいりました。

その論点を整理いたしますと，まず設立場所でありますが，設立検討委員会の報告書では，一体型小中一貫教育校の設立が望ましいとし，その設立場所については小学校と中学校のいずれも一長一短があるため両論併記とされました。この報告書を受けて，平成２５年度８月に開催した教育委員会議では，行事，体育，部活動等の教育活動を充実させるた

めには広いグラウンドが必要になること，地震，津波を考えたときの安全確保の観点から耐震性や高台にあることの立地条件を考慮し，現吉名中学校で一体型小中一貫教育を実施することを決定しております。

その後，その決定についての説明会や保護者，地域の代表者等との協議を行っておりますが，保護者からは現吉名小学校での設立を希望することや，現吉名中学校での設立だと通学距離が延びるという意見があり，地域の方からは教育委員会の決定に協力し，今後，準備委員会等でしっかり議論していきたいが，保護者には様々な思いがあるので，教育委員会と保護者とで十分話し合いをするようにとの意見がありました。

今年度になり，４月３０日に小・中学校，保育所のＰＴＡ新役員との協議を行っておりますが，そこで挙げられた課題としましては，小学生と中学生の体力差から生じる児童の負担への不安や，中学生になる自覚が育たないのではないかといった施設一体型小中一貫教育への不安，また新しい教育環境に適応するまでの支援体制についての質問等や中学校の存続を望むといった意見もありました。

こうした保護者の不安を解消するため，これまで説明会等で誠意を持って説明しておりますが，今後小中一貫教育に係る教育講演会の開催や，本年４月から始まった忠海中学校と忠海西小学校の同一施設内での学校生活の状況についても，必要に応じ情報提供をしてまいりたいと考えております。

また，事業推進のための政策課題としましては，小中一貫教育の推進に取り組むことにより，学力を向上させ，豊かな心や健やかな体を育て，将来，地域で活躍できる人材を育成できるよう，安全・安心な教育環境の整備に取り組むことや，まちづくりの観点からも，学校の跡地を有効活用することにより，地域の活性化が図られていくことが重要であると考えております。

次に，吉名の子どもたちを吉名で育て，人材育成を図っていく点につきましては，小中一貫校を開設すれば，学校のアイデアで様々な取り組みができ，地域連携を軸とした特色ある学校づくりが可能になると考えております。９年間で児童・生徒を育て，教科学力や綿密な生徒指導の充実を図り，小学校，中学校の垣根をなくし「中１ギャップ」を解消し，不登校や問題行動を減少させていくことが期待されますが，それとともに，地域と一体となって進める小中一貫教育の視点を持たなければならないと考えております。

視点といたしましては，何よりも地域の実態と住民のニーズに基づく小中一貫教育であること，地域の将来を担う人材育成につながる地域密着型一貫校を目指していくことが重

要であると考えております。具体的には，吉名町の自然，文化，産業，人材を生かしたカリキュラムづくりや教育活動を推進し，学校が吉名町のまちづくりの中核となり，小中一貫校における人づくりがそのまま吉名町の地域における人材育成に直結するような地域に開かれた学校づくりこそが，吉名中学校区における小中一貫校の目指すべき方向性であると考えております。

次に，吉名っ子の，吉名っ子による，吉名っ子のための自立，連携，共生の教育実践につきましては，吉名小学校，吉名中学校におきまして小中連携教育として平成２２年度から新たに計画を策定し，「吉名町の子どもをみんなで育てよう」をスローガンに，義務教育９年間の連続性を意識した取り組みを進めております。

小・中学校共通の目指す子ども像を「自分の思いや考えを表現できる子・ふるさとを大切にできる子・ねばり強くがんばる子」とし，郷土愛にあふれる自主，自立ができる児童・生徒の育成の具現化に向けて一貫性のある取り組みとなるよう，合同研修会等を定期的に実施するとともに小中一貫校の開校に向けた工程表を作成し，計画的な推進を図っております。本年６月１日に行われました小・中合同運動会では，実施に向けて，児童会と生徒会が合同で活動しました。小・中学校で出た意見をそれぞれ持ち寄り，「小・中の絆をより深めること」や「力を合わせ全力で頑張っている姿を保護者や地域に伝え元気になってもらいたい」などの思いを出し合いながら児童会と生徒会が協議し，テーマを決定しました。テーマとなった「吉名団結，仲間を信じて心に残る運動会」を常に意識し，練習時から中学生が小学生を指導したり，手本を示したりする姿などが見受けられました。

また，吉名らしさを最大限に生かした特産物であるジャガイモを使った「ふるさと学習」は，地域再発見の学習となっております。昨年度は「ふるさと吉名をジャガイモでアピールする」という夢の実現を目指し，「竹原っこ夢プロジェクト」の取り組みとしても実施しました。吉名中学校グラウンドの東側の畑を「夢じゃが畑」として，小・中学校とともに使うジャガイモ畑として整備し，地域の方々とともに栽培をスタートさせました。販売促進のためのキャラクター作成，ジャガイモ料理のレシピの作成，ジャガイモを使ったお菓子の開発，修学旅行やよがんすのぉ祭りでの販売など，夢の実現に向けた多様な取り組みを積み重ねました。中学校２年生と小学校５年生の「ふるさと学習」の様子を参観した方から「学びの連続の中で中学生は自己有用感を持ち，小学生は憧れを持っているように感じた」「ともに学び合う姿が印象的であった。このような実践の積み重ねが郷土を愛する子供たちの育成につながると実感した」という感想が寄せられたことからも，学習

を通じて，児童・生徒の郷土愛が育成され，深まっていることが感じられております。こうしたことからも，さらに学習を継続し，より充実させていくことが重要であると認識しております。

このように複数の学年が合同で授業や活動を実施し，異学年の児童・生徒が交流することで，異年齢の他者と望ましい人間関係を形成し，又学習への動機づけが明確になるなどの教育的効果があると考えております。

さらに，地域の人々とのつながりを持つ取り組みとして，小・中合同で吉名地域の良さを知ることを目的とした小・中合同遠足や吉名町総合防災訓練等があります。小学校におきましては，地域との交流を取り入れた道徳参観日を実施し，ふるさと吉名地域の良さを知り，ふるさとを大切にする児童を育てるため，郷土愛をテーマとした授業を公開しております。このことからも，小・中学校が地域において小中一貫教育をどのように展開していくか考えた場合，児童・生徒の義務教育９年間におけるよりよい学びの実現や生徒指導上の様々な課題の解決のためには，施設一体型小中一貫教育と地域連携をあわせて取り組むことで，さらに取り組みが充実，発展し大きな効果が期待できるものと考えております。

これからも，「ふるさと吉名」を基盤とした小中一貫教育を地域とともにさらに充実，発展させていくことこそが必要であると考えております。

次に，文部科学省は，これまでも小中一貫教育について鋭意推奨してきましたが，このたびさらに一歩進んで，市区町村の判断で公立の「小中一貫校」を設置できる制度の導入に向けて検討を始めたと新聞等のマスコミを通じて報道されております。内容としましては，小学６年，中学３年の区切りにとらわれず，義務教育の９年間を通じたカリキュラムで教育することができ，９年の義務教育期間を弾力的に運用し，地域の実情などに合わせたカリキュラムの編成が可能になると想定されております。このことにより，小中一貫教育は系統性，連続性を重視した教育活動を展開できるとともに，小学校高学年からの教科担任制も導入しやすくなるといったメリットが考えられます。

このように，全国的に小中一貫教育が推進されている状況の中，吉名中学校区においても，これまでの小中連携教育をさらに充実させ，地域の特性を生かし，地域の実情に応じた施設一体型小中一貫校の設立を目指し，保護者，地域，行政が一体となって議論を重ねながら，着実に取り組みを進めてまいりたいと考えております。

以上，答弁を終わります。

議長（稲田雅士君）　９番。

９番（宮原忠行君）　できるだけ早く終わりたいと思っておりますんで。

まず最初に，私のほうの指摘といいますか，要望といいますか，国民健康保険税の現年度分徴収率９３％の確保ということについて，ちょっと触れておきたいと思います。

今年度も，５月末日の出納閉鎖ぎりぎりまで一生懸命徴収係においては努力されておる姿を見させて頂いております。また，先般も日曜日，課長においては恐らく答弁の勉強等いろいろ忙しかったと思いますけれども，納税相談を日曜日に実施をして，相当の努力をされておることにつきまして，まずもって敬意と感謝をあらわしておきたいと思います。

しかしながら，今年度の予算特別委員会の質疑においても見られたように，平成２４年度現年度分の徴収率が確保できなかったということは国保税を上げたからなんだと，こういう分析だった訳です。そうしますと今年度においても，まだ始まったばかりですから今の時点で予断と偏見を持って推断するということは避けたいとは思いますが，２４年度の例に倣うならば消費税も５％から８％に上がったと，なるほどマクロ経済で言えばアベノミクス効果もあって経済指標はよくなっておりますけれども，しかし竹原市内におけるいろんな，建設業者はそうでもないかもわかりませんけれども，小売業等においては４月から極端な消費不況といいますか，落ち込みが激しいと，こういうふうな実感をよくお聞きいたします。そうしますと，やはり相当国民健康保険の被保険者という方は相当支払い能力において厳しい状況に置かれておることは間違いがないと思う訳です。

それで，やはりそうした中で平成２４年の轍を踏まないということになれば，徴収係やあるいは税務課の取り組みはもちろんのこと，３月議会でも市長のほうに要請をさせて頂きましたけれども，全庁的な取り組みも，税務課長と緊密な連携をとりながら，状況によってはそうした体制を組まなければならないということも頭の中に入れておいて頂きながら，その都度，その都度の状況に応じた適切な対応とって頂いて，必ず９３％は確保して頂いて，苦しい中でも国民健康保険税の納付に爪に火をともしながら頑張って頂いとる方に，国民健康被保険者としての竹原市長のまさに誠心誠意が伝わるような結果を出して頂きますことをお願いを申しておきたいと思います。

それで，１番目の人口減少の問題です。

私も再々この場で質問をしてきました。答弁とすればこのような中身にならざるを得ないのかと思いますけれども，しかしながら前小坂市長においても，これまで国が行ってきた少子化対策というものが，全くと言っていいのかどうかわかりませんけれども，結果と

して効果を発揮していなかったということはお認めになっておられた訳です。恐らく現市長におかれてもそうじゃないかと思います。

そこで，一つの例といたしまして，かつて国民健康保険における老人医療の無料化，これに取り組まれた深沢晟雄さんという村長は，国の政策を待っていたんではこの寒村の住民は全く国民健康保険の恩恵に浴することはできない，とりわけ老人，子供です。だからこそ，国がやらないからこそこの深沢晟雄，貧乏な沢内村が命をかけて老人医療の無料化を実現するんだと言って，正に血のにじむ努力をされて我が国で最初の老人医療の無料化を実現をして，それが全国津々浦々にまで波及をしていったということもある訳ですね。

そこで，私も昨年の９月議会でも申し上げました，私は竹原市がこれまで行ってきた少子化対策について何もやっていないと言っとる訳じゃないわけです。むしろ，私は評価をさせて頂いておる。しかしながら，それだけの対策，施策を講じて来ながらも，なおかつ結果が出てこない，結果が伴っていないということについては，お互い真摯にこの結果というものを見詰め合わなきゃならんと思う訳です。それで，何が不足し，この政策は例えば子育て支援，乳幼児の医療の無料化とかもいろいろやっとる訳ですけれども，それがどの程度の政策効果を現し，あるいは現していないとかということを，今日段階，市長も代わられた訳ですから改めて制度の点検をして頂いて，足らざるものは，国の施策を待っていてはこの竹原市における少子化による人口減少に歯どめがかからないということになれば，やっぱり市民の皆さんの共同の財政であるところの市税をつぎ込んででも人口減少に歯どめをかける施策を打って，そして全国から竹原市に視察に来られるような，そうした結果の出る，効果のある政策を打ち出していかなければ，私は結局，頑張っておるんだけども政策効果が上がらないということを，いつまでも同じ議論を繰り返さざるを得んと思うんです。恐らく市長におかれても，同じ議論というのは望んでおられないと思う訳です。ですから，すぐにという訳にはいかんでしょう，必ず点検をして頂いて，実効の上がる政策を是非とも実現をして頂くことを要望させて頂いておきたいと思います。

それから，最後に吉名における小中一貫校の問題です。

昨日も川本議員の方も訴えておられましたけれども，私は教育委員会事務局，よく頑張っておられると思うんです。その努力は高く評価したいと思うんです。しかしながら，川本議員も指摘されておられたように，その熱意というものが相手に伝わらなければ，ある意味で言えば空回りですよね。そうしますと，人間，私もそうですけれども何事も変わる，あるいは変化をしていくということに対して何とない不安感とか恐れとか，そうした

もんがあります。ですから，これは人間共有の心理です。

しかしながら今，例えば福島県の双葉郡８町村の教育長たちは，あの荒廃したまさに地域崩壊の危機にある双葉郡８町村を，復興再生していくための人材を育てるための教育としては一貫校しかないよと，こういうふうに考えておられる訳です。私はやはり，竹原市全体における少子化による人口減少，共通の課題ではあろうと思いますけれども，私はとりわけ吉名における小中一貫の取り組みは地域を挙げて，少子化による人口減少こそがともに手を携えて心を一つにして立ち向かうべき政策課題であるという，その強い認識を是非とも共有をして頂きたいと思う訳です。

ほで，私がお聞きしておるところでは小中一貫教育に関する疑念と不安として，教育荒廃の問題，いじめの問題等，昨日川本議員の方からも指摘がありましたけれども，教育再生実行会議はあの大津市のいじめによる自殺事件を契機として作られた分なんです。その中で教育再生実行会議が出した結論は，いじめの問題に正しく立ち向かって行って解決をしていく制度とすれば，やはり一貫校しかないという結論に達した訳です。もちろん今の，例えば義務教育９年間を４，３，２とかそうした学制改革も選択できるような方向性を打ち出しておりますけれども，本来の教育再生実行会議が目指したいじめを根絶していくための制度とすれば，この小中一貫校しかあり得ないという結論に達した訳で。ですから，そのことをもう少し保護者なり住民の方にも心の底から納得して頂けるような議論の展開と，何といっても大事なのは一貫校教育の推進を決めて，そしてそれを実現せんとする教育委員会の私は熱意じゃろうと思うんです。どこ行っても結果を出したところで，まちづくりで結果を出しているところについて言えば，それが首長であれ職員であれ非常に熱心なと。ある意味で言えば，火に油をついでその問題に取り組むというような驚嘆すべき情熱というものを持って，住民の皆さんあるいは関係者の皆さんを説得されていって，その結果全国的に高い評価を得るような結果を出されておるところがある訳です。

先般，民生産業委員会の行政視察として水俣市へ参りました。あの公害の水俣病の水俣市であります。そこも，農業で言えば今の福島と同じように，水俣病が最初奇病と言われただけにうつるんだというような風評の中で，水産物だけではなくて農産物も全く売れないというような極めて厳しい状況にあった中で，何としてもこの水俣で農業を再生をして，水俣復興へつなげていくんだという，福田興次さんという方でございますけれども，今株式会社福田農場として全国的に注目を浴びております。ここも本当に山をくわ一つで切り開く，開拓していくというような，そういう努力をされてきて今全国的に注目をされ

ています。

ほで，また水俣においては市長の吉井正澄さん，そして職員の吉本哲郎さんという方がおられます。特にこの吉本哲郎さんにおかれては，とにかくみんなの中に入っていくと。机の上で何ぼデスクワークやっても解決つかんという中で，まさに水俣の市民の中へ分け入っていってコンセンサスをつくり上げていった訳です。そして，松本議員のほうも昨日触れられたかもわかりませんけれども，とにもかくにも水俣は水俣病という世界にも例のない公害で苦しんだ町だから，とにかく水と食べ物には気をつけようと。現実に川を汚し，いろいろな環境汚染を引き起こしておるのも我々一人一人の市民ではないかという，こういう言い方がいいかどうかわかりませんけれども，そういう考え方から非常に水と食べ物には気をつけていく町，そしてその中で２４分別をしていったという，こういう形です。そして，同時に２４分別を進めていく中で，もうとにかく総合行政です。例えばここはまちづくり推進課へ，ここは教育委員会へ，ここは財政課という話じゃない訳です。スタート時はかなり環境問題に対して市民の意識というものは上がっているとはいえ，やはり面倒くささというものもつきまといますから。ですから，そこの分別を収集する場所には，市の職員は自分の出身地であれば勤務時間じゃろうが勤務時間外であろうが，皆出て行っとるんです。そういうふうにもう体制ができとる訳です。

ですから，例えば今吉名中学校区における小中一貫校についても，こういう言い方がいいかどうかわかりません，例えば総務部長の中川さん，吉名におかれては非常に人望も名声もあられます。そういう方も一緒に小中一貫校の，例えばＰＴＡはそこまでしなくてもいいかもわかりませんけれども，自治会連合会等との話し合いの場にはそういう方も出て行って，総合力を駆使をして，一日も早い小中一貫校の推進体制をつくるべきじゃないかと，このように考える訳です。

ほで，私もできるだけ早く１時間以内という思いがありますので，さらに言えば，先ほど休憩時間の間に，海士町における小中一貫教育，国よりもはるかに先駆けて取り組んできた教育実践が，福島の双葉郡の８町村教育委員会が双葉郡復興のシンボルとしてそれやっていくんだというふうになっとる訳です。

じゃからそういうことも含めて，改めて吉名町における教育委員会とか，あるいは市長部局という区別を超えて，何としても教育長の方に，是非市長の方に要請して頂いて，そういう今ある竹原市の持つ，教育委員会含めて，総合力を駆使をしてスピード感を持って，一日も早い小中一貫校推進体制を確立することを要望して終わりたいと思います。教

育長，答弁をひとつお願いをいたしたいと思います。

議長（稲田雅士君）　教育長。

教育長（竹下昌憲君）　吉名小中一貫校に関しましては，これまで地域の皆様あるいは保護者の皆様と教育委員会，協議する中で方向性，方針を決定してきております。その方向性を遵守する，そういう気持ちにはいささかのぶれもございません。

今後の取り組みにおきましては，先ほど議員さんおっしゃいましたように，市長部局の方と十分な連携をとらせて頂きながら，地域の皆様あるいは保護者の皆様の御理解を頂いて，強い信念を持って取り組んでまいりたいと，かように思っておりますのでよろしく御理解のほどお願い申し上げます。

議長（稲田雅士君）　以上をもって宮原忠行君の一般質問を終結いたします。

これをもって一般質問を終結いたします。

議事の都合により，明６月２０日午前１０時から会議を再開することとし，本日はこれにて散会いたします。

午後１時５２分　散会